

Title	ポーの「黒猫」
Sub Title	An essay on “The Black Cat”
Author	猪股, 光夫(Inomata, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.50 (2007. 3) ,p.113- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20070331-0113">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20070331-0113</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ポーの「黒猫」

猪 股 光 夫

## 1 はじめに

わたしたちは他者のまなざしの真実が分らないにもかかわらず、あたかも分っているかのように振るまう。たとえば他者のまなざしは、わたしたちが期待するように、自分を見ているかどうか分らない謎であるにもかかわらず、自分を見つめているはずだと思わないかぎり、男と女の親密な関係は成立しないだろうし、ましてや夫と妻というかたちで毎日を共にすることなど不可能だ。彼女の欲望の真実など分らないにもかかわらず、彼女はあれを欲している、これを欲していると信じることで彼女を理解可能なものにする。他者は謎めいたまなざしによっていったい何を自分に求めているのか、真剣に考えるのが恐ろしいのではないか。他者の欲望の真実に向き合うのが耐えがたいのではないか。したがってたとえば、誕生日や結婚記念日のプレゼントをすとか、家を買うとかして、あたかも相手を理解しているかのように振るまい、他者の欲望にヴェールをかけている。おそらく他者の欲望を遮るためのヴェールがなければ、他者との関係など、恐怖のあまり誰もがしりごみしてしまうのだろう。

このようなヴェールの発明は、その超源を、幼児と母との関係にさかのぼってみることができるかもしれない。母に抱きしめられて、優しいまなざしに見つめられ、子供がそのまなざしを見つめ返す、といった母と子の愛に満ちた楽園的なありようは、おそらく母のリアルで謎めいたまなざし

に直面したときの子供が、困惑と恐怖のあまり創造せざるをえなかった夢なのではないか<sup>1</sup>。母のリアルな欲望を子供は変形して、母は自分に無条件な愛を注ぎ、良い子になってほしいと思っているとか、りっぱな人間になって母を支えてほしいと思っている、といった幻想を捏造する。明確な意味に還元不可能な他者のまなざしにヴェールをかけて、自分を肯定してくれる魅惑の鏡に置き換え、子供はそこからすばらしい自己のイメージや意味を受けとっていく。意味づけすることのできない謎のまなざし、不安を引きおこすまなざしを鏡像化することで、子供は愛すべき自己像を獲得する。理解不能な欲望をあらわす他者のまなざしのなかに、おそらく自己が解体される場である他者のまなざしのなかに、自己の足場を築くこの大胆な転倒がなければ、母を愛したり、他者を愛したりすることなどできないだろう。わたしたちは多かれ少なかれ夢をみている。夢によってリアルな他者にヴェールをかけ、対話可能な親密な他者に置き換え、自己の意味をうけとる。そしてこの夢のことをわたしたちは「現実」と呼んでいるのかもしれない<sup>2</sup>。この夢のヴェールがなければ、わたしたちの現実感は失われ、脱現実という恐ろしい事態に陥り自己を喪失するだろう。夢に保護されてはじめて、わたしたちは、自分が生きているとか、人生の充実を味わうとか言うことができるのではないだろうか。

Edgar Allan Poe の“The Black Cat”「黒猫」（1843 年；1845 年）の語り手も、かつてはこのような夢のヴェールで作られた現実の中で生活していたのだが、次第にその生活に穴が開き綻びはじめる。さらにその綻びが大きくなりヴェールで遮られていた向こう側の世界と出会ってしまう。

ここからポーの「黒猫」という作品を、語り手の生活的現実が次第に解体して、通常は出会いそこねるリアルなものと余儀なく出会ってしまうプロセスとして考察してみたい。

## 2 幻想の機能

「黒猫」の語り手もかつては安定した、平和で夢のような生活を送っていた。

From my infancy I was noted for the docility and humanity of my disposition. My tenderness of heart was even so conspicuous as to make me the jest of my companions. I was especially fond of animals, and was indulged by my parents with a great variety of pets. With these I spent most of my time, and never was so happy as when feeding and caressing them. This peculiarity of character grew with my growth, and, in my manhood, I derived from it one of my principal sources of pleasure. To those who have cherished an affection for a faithful and sagacious dog, I need hardly be at the trouble of explaining the nature or the intensity of the gratification thus derivable. There is something in the unselfish and self-sacrificing love of a brute, which goes directly to the heart of him who has had frequent occasion to test the paltry friendship and gossamer fidelity of mere *Man*.

I married early, and was happy to find in my wife a disposition not uncongenial with my own. Observing my partiality for domestic pets, she lost no opportunity of procuring those of the most agreeable kind. We had birds, gold fish, a fine dog, rabbits, a small monkey, and a *cat*.<sup>3</sup>

“From my infancy I was noted for the docility and humanity of my disposition”と語り手は自分について語っているが、彼はまさに夢をみていたからこそ、そんなことが言えるのだ。のちに彼は愛する猫と妻を殺すことになる殺人犯なのに、文化的な善をつかさどる自我理想に従うことで、「おとなしくて思いやりのある」人間であるという夢をみていたのである。

よく一般に言われるように、善良な人間が悪夢をみるようなかたちで、殺人を犯すのではない。むしろ凶悪な殺人者が、善良で平和を好む良き夫である夢をみていたと言った方が適切である。夢は他者だけでなく、自分のリアルな欲望にもヴェールをかける効果があるので、彼は自己愛的なイメージをもって自己をながめることができる。動物も、妻という他者でさえも、彼にとっては自己の理想的なイメージを送り返してくれる鏡像的他者にほかならない。黒猫の語り手は大人になってからも動物とのつきあいだけに快樂を求め、いわば夢想的な快樂原則のなかでのみ生きる病的な自己愛者になっていく。“I ... was happy to find in my wife a disposition not uncongenial with my own”と言っているように、彼は妻や動物たちと快適な同質性の樂園を築いていたのだ。夢は願望充足である、とはよく言われることだが、彼の場合毎日の現実こそまさに願望充足をもたらしものである。しかし快樂原則のスムーズな流れは、必ず障害にぶちあたるだろう。あるいは夢や幻想はつねに外傷的なものを隠している。もともと外傷的なものとの出会いが、夢や幻想を要請せざるをえなかったのだから、それは壊れるのが宿命だとも言える<sup>4</sup>。

### 3 欲動の現れ

とりわけ彼が愛したのは Pluto（プルート）という名前の大きな黒猫だったのだが、この猫との愛の関係を破壊しにやってきたのは、大酒という悪魔であると語り手は主張している。

Our friendship lasted, in this manner, for several years, during which my general temperament and character —through the instrumentality of the Fiend Intemperance —had (I blushed to confess it) experienced a radical alteration for the worse. I grew, day by day, more moody, more irritable, more regardless of the feeling of others. I suffered myself to use intemperate language to my wife. (144–145)

善良な人間であるという夢のヴェールがしだいに壊れて、彼自身さえも気づかなかつたりアルな欲望が露わになる。彼の快適な夢を傷つけるのは、過剰な飲酒という欲望と言うより人間固有の欲動である。ホメオスタシス（恒常性）の原則を打ち破り、人間を極端な方向ヘドライブしていく欲動が突出して夢＝幻想を破壊してしまったのだ。幻想がスムーズに機能しているかぎり、欲動は隠され、調整され歪曲されているのだが、幻想の限界において欲動が前面化する<sup>5</sup>。過剰な飲酒の背後には欲動が働いている。酒を飲むことが、口唇的な欲動の表れとするなら、変形をこうむらない純粹の口唇欲動は満足を求めて、本人の意識を越えて、極端な場合本人が破滅するまで満足を求め続けるだろう。仮に欲動の完璧な満足があるとすれば、わたしたちの死を引き換えにする時なのだ。アルコール依存症は、緩慢な自殺であると言われるのはこのような意味においてである<sup>6</sup>。

ある晩相変わらず泥酔して帰ってきた彼は、黒猫が自分を避けているような気がして、猫を乱暴につかんだとたん、猫は驚いて彼の手首にかみついて傷をおわせる。彼は怒ってチョッキのポケットからナイフを取り出し、猫の片方の目を根こそぎえぐり出してしまう。しかししばらくするとこの傷はしだいに癒え、えぐられた目のあとはぼっくりと窪み、見るも怖い形相だったが、猫はもはや痛みは感じていないようだ。

黒猫の目をえぐる行為はすぐに Oedipus 王の自分の目をつぶす行為、白己処罰としての去勢の行為を想い出せるが、わたしたちの支脈においては、次のように考えるのが適切だとおもわれる。彼が黒猫の目をえぐるのは、欲動がもたらした飲酒の過剰によって夢のヴェールが剥げ落ちてしまい、黒猫が以前のように彼の白己愛を保証してくれず、むしろそのまなざしが彼を不安にさせるような姿をとりはじめたからである。黒猫のまなざしが彼を不快にし、その傷がなおったあとの怖い目の窪みも、おそらく彼をまだ見つめつづけているはずだ。黒猫のまなざしは彼の白己愛を映すどころか、彼を解体する凶器と化してしまい、夢のヴェールによって保証されていた彼の現実感覚が危機に瀕したために、黒猫の目をつぶし、さら

には縛り首にして殺さなくてはならないのだ。黒猫の片方の目と窪んだ傷あとはもはや彼の破滅のみを映し出している。

And then came, as if to my final and irrevocable overthrow, the spirit of *Perverseness*. Of this spirit philosophy takes no account. Yet I am not more sure that my soul lives, than I am that perverseness is one of the primitive impulses of the human heart—one of the indivisible primary faculties, or sentiments, which give direction to the character of Man. Who has not, a hundred times, found himself committing a vile or a silly action, for no other reason than because he knows he should *not* ? Have we not a perpetual inclination, in the teeth of our best judgment, to violate that which is *Law*, merely because we understand it to be such? This spirit of perverseness, I say, came to my final overthrow. It was this unfathomable longing of the soul *to vex itself*—to offer violence to its own nature—to do wrong for the wrong's sake only—that urged me to continue and finally to consummate the injury I had inflicted upon the unoffending brute.

(146)

Marie Bonaparte はこの “spirit of perverseness” を、道徳的な秩序を破りたい人間の原始の本能と捉え、面白い例をあげている。あるブルジョア女性が、嫉妬のために自分の息子の妊娠中の嫁を銃で打ち殺したあとで、自分は犯罪を犯している間中、避けてはとおれない義務を果しているのだと感じていた、と告白したという。ポーならばこの女性もまた片意地な精神に支配されていた、と考えるだろうとボナパルトは述べている。ボナパルトの指摘で興味深いところは、義務としての犯罪という部分である<sup>7</sup>。自分の生きることにまつわる様々な利害への執着からではなく、純粹に義務のようになされる犯罪とは、自我ではなく、無意識の主体とでもいうべ

きものと関係してくるだろう。自我の利害を守るためではなく、むしろ自我を破壊するようなかたちで、無意識の主体を満足させるために、義務のように遂行せざるをえない行為、ここで支配権をふるっているのは、自己保存の情熱ではなく死の欲動としか言いようのないもの、わたしたちのなかにありながら、明確な顔をもっていない未知ななにものかである。自己にとっての快樂や善のためでもなく、社会的な義務のためではなく、悪のために悪をなす欲動は、快樂原則の彼方にあるものだ。

たとえばわたしたちは、苦しい症状を取り除いてほしくて分析家を訪れる患者が、症状にしがみつki直ろうとしないのをどう考えるべきなのだろうか。患者が自己の症状によって悦びをえている不気味な欲動を仮定せざるをえないだろう。「普通」のわたしたちでさえ、合理的に考えれば、自我の利益に反するような自分の性格を変えようとしてもなかなか変えることができないのは、この不気味な欲動が満足を放棄しないからではないか<sup>8</sup>。

黒猫の語り手は、彼の意識にとっては苦痛でしかない行為を義務のように行う。猫が自分を慕っているのを知っているゆえに、涙を流しながら、猫を木の枝につるして縛り首にしてしまう。彼の行為はまたエロス化された攻撃欲動にドライブされたものでもある。対象を愛することが対象を破壊することであるような、また対象を破壊することが、自己破壊であるような根源的サド＝マゾヒズムの欲動が働いているのだ<sup>9</sup>。

猫を殺した目の夜、語り手の家は火事になり、家財はすべて丸焼けになってしまう。焼け残った白い壁面には人だかりができていたので、好奇心にかられて彼は近づいてみる。

The words “strange!” “singular!” and other similar expressions, excited my curiosity. I approached and saw, as if graven in *bas relief* upon the white surface, the figure of a gigantic *cat*. The impression was given with an accuracy truly marvelous. There was a rope about



the animal's neck. (147-145)

マリー・ボナパルトは、この火事は少年の母親に対する尿道エロティシズムの表現であると同時に、そのような欲望に対する処罰の表現でもあると主張している。彼女によれば黒猫は少年にとって母である。巨大な猫の姿が白い壁に彫られたように焼きついているのは、小さな子供の目から見た母であり、子供にとって母は大きいだけでなく、神格化の投影によってさらに巨大な姿に見えるからだということになる<sup>10</sup>。

わたしたちの文脈からすれば、火事がここで起こるのは必然である。*Metzengerstein* (1836 年) のなかで起る火事と同様に、火事は欲動の対象なのではないか。あるいは *A Descent into Maelstrom* (1841 年) の大渦の旋回運動を想起してもよいかもしれない。欲動に真の満足をもたらす対象は、消費可能な本能の対象とは違って、火事や大渦巻のような消費不可能な対象である<sup>11</sup>。火事は文字通り炎の燃えるまなざしだとすれば、黒猫の恐ろしいまなざしに重なってくるはずだ。火事からはかろうじて逃げおおせた語り手は、火事の焼け跡に刻まれた巨大な猫の姿には見つめられ続けるのだ。殺したあとでも彼に付きまとうことを止めない黒猫は、取り除くことのできない欲動の対象であり、白い壁に浮かびあがる巨大な姿によって彼を見つめつづける。

#### 4 第二の猫

不思議なことに語り手は猫を失ったことを残念に思うようになり、最初の黒猫ブルートに毛並みの似た第二の猫を探し回るようになる。

For months I could not rid myself of the phantasm of the cat; and, during this period, there came back into my spirit a half-sentiment that seemed, but was not, remorse. I went so far as to regret the loss of the animal, and to look about me, among the vile haunts which I

now habitually frequented, for another pet of the same species, and of somewhat similar appearance, with which to supply its place. (148)

そしてある晩酒場で、酔いつぶれた彼は、ジンカラム酒の大樽の上に黒猫を発見する。

I approached it, and touched it with my hand. It was a black cat—a very large one—fully as large as Pluto, and closely resembling him in every respect but one. Pluto had not a white hair upon any portion of his body; but this cat had a large, although indefinite splotch of white, covering nearly the whole region of the breast. (149)

あきらかに彼は、最初の黒猫との関係をふたたび演じようとしている。最初の黒猫ブルートとの不幸な出来事を再演したいのだ。ここに、無意識のうちに過去の不幸な体験を繰り返したいという「反復強迫」をみてとることは容易だろう<sup>12</sup>。もちろん彼は第二の黒猫において、不幸な出来事を繰り返したいと意識的に意図しているわけではない。最初はこの猫を気に入り、猫の方も彼になつき、妻も猫をかわいがる。今度こそ幸福な出会いを期待していた彼は、思わぬなりゆきに当惑せざるをえない。

For my own part, I soon found a dislike to it arising in me. This was just the reverse of what I anticipated; but I know not how or why it was —its evident fondness for myself rather disgusted and annoyed. By slow degrees, these feeling of disgust and annoyance rose into the bitterness of hatred. (149)

彼は再び猫に対する激しい嫌悪を体験するのだが、これは彼が意識的に予期したところとは逆の事態である。何故かは分らないが猫がなつけばなつ

くほど彼は困惑した憎悪におそわれる。そしてまるで悪疫の息から逃れでもするかのように、彼は猫を避けるようになる。彼の憎悪に拍車をかけたのは、ブルートと同じようにこの猫も片目がつぶれていたことだ。彼は知らないうちに最初の黒猫と同じように、片目のつぶれた猫と出会っていたのだ。彼の悲劇への無意識的な意志は明らかである。

一方猫のほうは彼をますます慕い、椅子の下にうずくまったり、両足の間に入って彼を転びそうにさせたり、服に爪を引っ掛け胸のあたりまでよじ登ったりして彼に付きまとう。猫の執拗さに対する憎悪の背後には、彼も認めているように猫への恐怖がある。

I am almost ashamed to own—yes, even in this felon’s cell, I am almost ashamed to own—that the terror and horror with which the animal inspired me, had been heightened by one of the merest chimaera it would be possible to conceive. My wife had called my attention, more than once, to the character of the mark of white hair, of which I have spoken, and which constituted the sole visible difference between the strange beast and the one I had destroyed. The reader will remember that this mark, although large, had been originally very indefinite; but, by slow degrees—degrees nearly imperceptible, and which for a long time my Reason struggled to reject as fanciful—it had, at length, assumed a rigorous distinctness of outline. It was now the representation of an object that I shudder to name—and for this, above all, I loathed, and dreaded, would have rid myself of the monster *had I dared*—it was now, I say, the image of a hideous—of a ghastly thing—of the Gallows!—oh, mournful and terrible engine of Horror and of Crime—of Agony and of Death! (150-151)

第二の黒猫にたいする彼の恐怖は、第一の黒猫をなぜ殺害せねばならなか

ったかをはっきりと説明している。第一の猫のまなざしは、第二の猫において“splotch of white”となって回帰する。彼はこの白い斑点に見つめられるのが恐怖なのだ。Macbeth 夫人の洗っても洗っても取り去ることのできない手についた血痕のことを思い出すとよいかもしれない。夫人はこの血痕に見つめられて発狂してしまったのではないか。

マリー・ボナパルトは、第二の猫が酒場で、酒の大樽の上で発見されたことと、白い斑点が白いミルクを表すとして、第二の猫の発見を、母の乳房を吸っていた幼年期への回帰とみなしている。彼女によれば第一の猫は“anal-sadistic and phallic stage”における母であり、第二の猫は“oral stage”における母であることになる<sup>13</sup>。第二の猫との出会いは、第一の猫より、より深い、より太古の対象とのドラマの再演と考えることができる。

しかしながら人間の最初の官能的快楽の対象である乳房が、絞首台のかたちをとって彼に恐怖をあたえるのは、何という皮肉だろうか。乳房につきまといわれて、逃げまわる彼の姿は、人間が成長のプロセスで喪失した、愛着の対象にのちに再会してしまった時の困惑を表現していると考えべきだろう。楽園幻想をかきたてる乳房が、逆に不気味なものとなって彼に襲いかかってきたのだ<sup>14</sup>。

幻想を構成する対象が、表象のスクリーンを打ち破って突出してしまえば、もはや幻想は成立せず、したがって主体は消滅の危機に瀕する。この時彼は乳房を吸う主体ではなくて、自己＝乳房となり、自分が他者に吸われるような事態になるのではないか。幻想の対象に無媒介に出会うことは、幻想の完璧な実現ではあるが、自己の世界の崩壊でもあるだろう。それゆえ彼はあの白い斑点を恐れ、出来ることならあの怪物を亡きものにしてしまいたいと思うのだ。

## 5 失われた対象

語り手にとって怪物化した猫は付きまとうことを決してやめようとし  
ない。

Alas! Neither by day nor by night knew I the blessing of Rest any more! During the former the creature left me no moment alone; and, in the latter, I started, hourly, from dreams of unutterable fear, to find the hot breath of *the thing* upon my face, and its vast weight—an incarnate Night-Mare that I had no power to shake off—incumbent eternally upon my heart! (151)

怪物は昼も夜もなく彼に襲いかかり, “blessing of Rest” を奪ってしまう。怪物は彼の顔に熱い息をふきかけ, 全身にのしかかり, 悪夢をもたらす。この息がつまる閉塞感こそ, 失われた対象との再会の特徴ではないか。この悪夢的な出会いに欠けているのはいわば空白と隙間であり, その代わりに過激な充満の苦痛=悦びがあふれかえっている。あまりの充満はわたしたちの現実感覚を奪い, 空白によって保証されたいわゆる現実の「安らぎの恵み」は消滅してしまう。ここにあるのはわたしたちの手に余る大きな悦びと不安である。表象のスクリーン(仕切り, 遮蔽物)から突出してしまった“*the thing*”「もの」の熱い息が全身をおおいつくし, 目や口や耳や, 皮膚の穴という穴を埋めつくすような事態を想像してみればいい。さらに言えば人間の身体の表面にある穴=性感帯がすべて埋めつくされた状況がいかに快楽を越えた悦び=苦痛をもたらすかは容易に理解できるだろう<sup>15</sup>。Jacques Lacan ならこのような状況を“lamella”「ラメラ」との遭遇であると言うだろう。

The lamella is something extra-flat, which moves like the amoeba. It is just a little complicated. But it goes everywhere. And as it is something—I will tell you shortly why—that is related to what the sexed being loses in sexuality, it is like the amoeba in relation to the sexed being, immortal—because it survives any division, any scissiparous intervention. And it can run around.

Well! This is reassuring. But comes and envelopes your face while you are quietly asleep.<sup>16</sup>

あらゆる失われた対象が、その代理になってしまうような根源的な対象として、ラカンはラメラの神話を語っている。人間が誕生して文化のなかに入るときに失われる乳房や、糞便やまなごしのような対象の中心にラメラは位置づけられる。したがって人間が性別を刻まれるやいなや失われる不滅の生命体ラメラは、語る存在にとってノスタルジーの絶えざる対象となるだろう。ラメラとの適切な＝不可能な距離を設定してくれるのが、表象のスクリーンであり、スクリーンごしにラメラを起源として派生するであろういわば代理の対象と関係しているかぎり、安全であり快楽原則に導かれた欲望の世界に住むことができる。いったんラメラから分離した文化的主体が、ラメラと再会してしまったのが「黒猫」の悲劇と言える。

## 6 「現実」の再構築

彼がこの怪物の殺害を企てるのは、「安らぎの恵み」を取り戻し、さらに自己の現実感を回復するためである。

ある日のこと、妻と二人で地下室への急な階段を降りていったとき、猫が後をついてくる。猫のせいで階段をころげ落ちそうになった彼は、逆上して手斧を振り上げ猫をめがけて打ちおろすのだが、止めようとする妻の手をふりはらい、妻の脳天めがけて斧を打ちおろしてしまう。その後彼は慎重に死体の隠匿にとりかかる。マリー・ポナパルトに言われるまでもなく、猫は母であり、女であり、妻であることはあきらかである。したがって彼は、猫を殺そうと意図しながら妻を殺してしまったことになんの困惑も違和感もあらわさないのだ。ただ冷静に死体の処理をするだけである。

彼は死体を切りきざむのでも、燃やすのでもなく、死体を地下室の壁のなかに塗りこめてしまおうと決心する。他の方法ではなく、死体を地下の壁に塗りこめるという死体処理の方法には意味がある。死体と自己との適

切な距離をとってくれる、スクリーンを修復しようとしているのだ。イメージや言語という壁によって、リアルなものに蓋をするのと等価な象徴的な身振りである。煉瓦を取りのけて死体を押しこみ、前の通りに壁をすっかり塗り、誰にも細工のあとが見えないようにしてしまう。壁をもと通りに塗り上げ、散らかったごみをかたづける彼の行為は、世界についたほんのわずかなしみもすべてかたづけ、自分をみつめるまなざしを消去しようとしているようだ。

It is impossible to describe, or to imagine, the deep, the blissful sense of relief which the absence of the detested creature occasioned in my bosom. It did not make its appearance during the night—and thus for one night at least, since its introduction into the house, I soundly and tranquilly slept; aye, *slept* even with burden of murder upon my soul! (153-154)

彼はその晩ぐっすり安らかに眠ったと喜んでいるが、それは一時的にせよリアルなものが取り除かれ、いねば想像的な調和が回復したからだ。彼は脆弱なスクリーンを再構築して、つかのまの自己愛的な解放感にひたっているのだが、ここで回復されたかにみえるのは、いわば象徴的な秩序ではないことに注意しなければならない。そもそも彼は去勢による象徴化が希薄であるため、通常は失われている対象が回帰して脅威を味わっていたのである<sup>17</sup>。彼の想像的な自己は、象徴化の裏打ちを欠いたものであるかぎり、もろい自己であらざるをえない。したがってリアルなものが彼のなかに容易に侵入してきて彼を充満させて無力にしてしまう。彼は充満から逃れようと、黒猫を殺し壁に塗りこめるのだが、この行為は彼が充満に切断と空虚をもたらすための自己去勢の試み、いわば過剰な悦びからの分離の試みと考えることもできる。しかしもともと象徴化されえないものは、いくら壁のなかに塗り込めてみても、彼に付きまとうことを止めない。

警官がやってきて家宅搜索するが、彼は死体の隠し場所に自信があるので、腕を組み悠然と家のなかを歩きまわる。警官が納得して引きあげようとしている時に、ふたたび片意地の精神が頭をもたげる。彼は嬉しさを抑え切れず、死体を塗りこめてある部分の煉瓦を杖で叩いてしまう。彼はいかに自分が完璧にリアルなものを遠ざけて安全なところにいるかを他者にも承認してほしかったのと同時に、完全犯罪による喜びにひたっている自分を処罰したいという、マゾヒスティックな自己処罪欲求にかられたのだ。自己の完璧な犯罪を誇らしげに告白したいという欲求は、マリー・ボナパルトが指摘しているよう、露出症であり、倒錯的な欲動の発現である<sup>18</sup>。

But may God shield and deliver me from the fangs of the Arch-Fiend! No sooner had the reverberation of my blows sunk into silence, than I was answered by a voice from within the tomb! —by a cry at first muffled and broken, like the sobbing of a child, and then quickly swelling into one long, loud, and continuous scream, utterly anomalous and inhuman— a howl—a wailing shriek, half of horror and half of triumph, such as might have arisen only out of hell, conjointly from the throats of the damned in their agony and of the demons that exult in the damnation.

Of my own it is folly to speak. Swooning, I staggered to the opposite wall. For one instant the party upon the stairs remained motionless, through extremity of terror and awe. In the next, a dozen stout arms were toiling at the wall. I fell bodily. The corpse, already greatly decayed and clotted with gore, stood before the eyes of spectators. Upon its head, with red extended mouth and solitary eye of fire, sat the hideous beast whose craft had seduced me into murder, and whose informing voice had consigned me to the hangman. I had walled the monster up within the tomb! (155)



## 7 おわりに

「黒猫」においてわたしたちが目撃するのは、猫や妻を愛することは彼らの殺害であり、黒猫を自己愛的に見つめることは、怪物の恐ろしいまなざしに見つめられることであり、犯罪の隠蔽は露出症となり、他者への攻撃はマゾヒズムであるような奇妙なループである。さらにわたしたちが目撃するのは、自己が語ろうとすることは、語られることであるという不気味なループだ<sup>19</sup>。

最後に彼は “In the rabid desire to say something easily, I scarcely knew what I uttered at all” (155) と言い、そのあとすぐに “a howl—a wailing shriek, half of horror and half of triumph, such as might have arisen only out of hell” と表現するしかない恐ろしい声によって彼は徹底的に語りかけられ、犯罪が露呈してしまう。彼は何かを語ろうとして、他者の不気味な声によって語られてしまうのだ。通常は意味のスクリーンによって仕切られている非意味の領域が彼を捉えて離さない。黒猫は取りこわされた壁の背後で “with red extended mouth and solitary eye of fire” という様子で彼をみつめつづける。黒猫のまなざしと鳴き声が彼を破滅へと導いたのだ。

欲勤の目的は、そのゴールに達することではなく、対象のまわりをめぐる循環であり、その循環を反復することで満足する、ラカンは言っているが<sup>20</sup>、黒猫をめぐる欲勤は、さらにストレートで致死的な次元に達し、死の欲勤としての顔を隠そうとしない。

## 注

1. たとえば Alice Miller は *The Drama of the Gifted Child*, trans. Ruth Ward (New York: Basic Books, 1981) 3-32. のなかで、不安や困惑にみちた母親の眼差しで見つめられた幼児は、生涯自分の鏡像を発見することができない、と述べている。しかしながら彼女のもとにやってくる被分析者たちは、分析の初期において、自分は幸せな子供時代を送ったと主張するという。このような真実の否認と反転の中に彼女は “narcissistic disturbance” とい

- う症状の特徴を見出している。
2. ここで言う「現実」は Jacques Lacan の“... the world is merely the fantasy through which thought sustains itself... “reality” no doubt, but to be understood as a grimace of the real.”といった発言に基づいている。Jacques Lacan, *Television*, trans. Jeffery Mehlman (New York: Norton, 1990) 6. この拙論で使われている「夢のヴェール」とか「リアルなもの」といった言葉も、ここで言われている“fantasy”, “the real”といったラカンの文脈を考慮している。
  3. Edgar Allan Poe, *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, volume v, ed. James A. Harrison (New York: AMS Press, 1965) 143-144. 以下ポーの「黒猫」からの引用はこの版の該当頁数による。
  4. J. Laplanche and J.-B. Pontalis, *The Language of Psycho-Analysis*, trans. Donald Nicholson-Smith (New York, London: Norton, 1973) 318. の次の記述を参照。“... phantasy is also the locus of defensive operations: it facilitates the most primitive of defence processes, such as turning round upon the subject’s own self, reversal into the opposite, negation, and projection.”
  5. 欲動と幻想の関係について Jacques Lacan はこう述べている。“...after the mapping of the subject in relation to the *a*, the experience of the fundamental phantasy becomes the drive.... How can a subject who has traversed the radical phantasy experience the drive?” Jacques Lacan, *The Four Fundamental Concepts of Psycho-Analysis*, trans. Alan Sheridan (New York: Norton, 1978) 273.
  6. Karl Menninger, *Man Against Himself* (San Diego, New York, London: A Harvest/HBJ Book, 1985) 140-161.
  7. Marie Bonaparte, *The Life and Works of Edgar Allan Poe*, trans. John Rodker (London: Imago, 1949) 462.
  8. Sigmund Freud, *Beyond the Pleasure Principle, The Standard Edition of The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. trans. James Strachey, vol. XV111 (London: Hogarth, 1955) 36. 以下フロイトからの注はこの全集の該当頁数による。
  9. 攻撃欲動とエロスとの関係については、片田珠美、『攻撃と殺人の精神分析』（トランスビュー、2005年）105-120, 第3章「性と幻想」参照。
  10. Bonaparte, 465.
  11. 欲動の対象についての詳細は次の論文を参照。Maire Jaanus, “The Demontage of the Drive”, *Reading Seminar XI*, ed. Richard Feldstein, Bruce Fink, Maire Jaanus (New York: SUNY, 1995) 119-136.
  12. 反復強迫についてはまずフロイトの論を参照すべきだろう。Sigmund

Freud, *Beyond the Pleasure Principle*, 18–23.

13. Bonaparte, 473.
14. 「不気味なもの」に関しては、フロイトの次の発言が最も基本的なもののだろう。“the *unheimlich* is what was once *heimisch*, familiar; the prefix ‘un’ [‘un-’] is the token of repression.” Sigmund Freud, “The Uncanny”, XVII. 245.
15. ここではラカンの“jouissance”を念頭においている。Elizabeth Wright はこの概念について次のように簡潔にまとめている。“... it meant ‘enjoyment’, specifically sexual enjoyment, but it came to be used for *drive satisfaction*, a satisfaction that is beyond Freud’s pleasure principle.” Elizabeth Wright, *Lacan and Postfeminism* (Cambridge: Icon Books, 2000) 69.
16. Jacques Lacan, *The Four Fundamental Concepts of Psycho-Analysis*, 197.
17. フロイトとラカンの「去勢」概念の違いと的確な解釈については、Terry Eagleton の 論 を 参 照。Terry Eagleton, *Literary Theory* (Oxford: Basil Blackwell, 1983) 154–170.
18. Bonaparte, 463.
19. 見る，聴く，語る，といった自明に思われる能動性が「原抑圧」によって成立すること。つまり見られ，聴かれ，語られる受動性が，「原抑圧」によって能動性に変換される構造は藤田博史氏が詳細に論じている。藤田博史，『幻覚の構造』（青土社，1993 年）175–190.
20. Lacan, 168. “*la pulsion en fait le tour*”, に訳者の Sheridan はこのような註をつけている。What the formula means, then, is a combination of (1) ‘the drive moves around the object’ and (2) ‘the drive tricks the object’.

## An essay on “The Black Cat”

Mitsuo Inomata

The narrator in “The Black Cat” by Edgar Allan Poe lives a peaceful life together with his wife and *a cat*, declaring “from my infancy I was noted for the docility and humanity of my disposition.” This peaceful life, however, does not last as long as his narcissistic ego expects. His fantasy concealing what Jacques Lacan would call “the real” gradually collapses due to his “intemperance,” his alcoholism. He begins to hate his cat just because he loves it. He is driven by aggression to hollow out an eye of the cat with a knife and finally in tears to hang it on a tree. His ambivalent attachment to this cat impels him to find a second cat. Unaware of the catastrophe it will bring, he is overjoyed to find a cat similar to the first one. He unconsciously tries to repeat the tragedy with the second cat. One day he kills both the cat and his wife with an axe and buries them in the wall. When he is highly elated by his perfect crime, a howl arising out of the wall discloses what he has done.

Assuming that “The Black Cat” deals with the disintegration of fantasy triggered by an invasion of “the real” into everyday life of the narrator, I will examine the work by making reference to the psychoanalytic articles by Sigmund Freud and Jacques Lacan. My focus is on analyzing the relationship between “reality” fabricated by fantasy and “the real,” whose exclusion is constitutive of “reality.” “Reality” is here supposed to be the world of “the pleasure principle” whose aim is to maintain “homeostasis,” whereas “the

real” is the world of “drive” aiming at satisfaction “beyond the pleasure principle.” “The spirit of perverseness”, characteristic of Poe’s world, can be considered to be such drive as brings excessive satisfaction to the narrator. His encounter with “lost objects,” such as “gaze,” “breast,” and “lamella,” which human beings lose at the time of entering the cultural world of images and language, is also possible in the world of drive. So he experiences the unbearable satisfaction of the drive Lacan calls “jouissance.” We can only fantasize “lost objects”, because we are (un)fortunately protected from the lethal objects by the network of signifiers.